理美容師 訪問介護の資格持ちサービス

髪のお手入れ お年寄りへ出前

外出いらず 心もスッキリ

外出がままならないお年寄りらの自宅でカットしたりパーマをかけたりする「訪問理美容」。高齢化率が上昇するなかサービスが喜ばれ、介助の知識を身につけた訪問介護の資格を持つ理美容師のニーズが高まっている。

吉祥寺にある2階建て一軒家の1階8畳和室にシートが敷かれ、鏡が備え付けられる。そばにはシャンプー台。長男家族と暮らす女性(81)が栗毛色にカラーリングしていた。

女性は目や足が不自由になり、自宅から10分ほど歩いて通っていた美容室へも、怖くて出かけられなくなった。

女性が話しかける。「この前、電話した?」「いいえ」「誰だろう」……「変な電話ですね」「いやねぇ」

訪問美容・理容を手がける「ビーフェル」(武蔵野市)のスタッフが髪を染めながら応対する。

女性は白髪が多いのを気にしていた。訪問美容の存在を知り、2カ月に1回のペースで依頼する。「だって、きれいにしてもらいたいじゃない」。鏡を見入っていた。

ビーフェルには20~50代の男女のスタッフが20人。全員が訪問介護の資格を持ち、都内の自宅や介護施設を訪れる。

美容師だった代表の米崎康正さん(61)は2001年に訪問介護員となり、在宅ケアに携わった。04年、小金井市の80代の男性の自宅を訪れると、男性が自殺を図っていた。走り書きのメモには「家族に迷惑をかけたくない」。一命を取り留めた男性の髪は伸びきっていた。カットしてドライヤーで乾かし、セットしてあげた。穏やかな表情が米崎さんの進む道を決めた。

首都圏の約30人の自宅や70の施設を訪ねる。訪問して髪を切ったりパーマをかけたりするだけでなく、介護資格を持つことが信用を高め、依頼が増える。米崎さんは介護を専門とする講師を招く研修センターをつくり、スタッフは認知症患者や寝たきりの人への対応法や、ベッドや椅子からの移動や誘導の方法などを学ぶ。

八王子市内の有料老人ホーム。3階ロビーに花が飾られ、待合室に見立てたソファには雑誌が並ぶ。軽快な歌謡曲が流れ、ラベンダーの香りが漂う。「出前美容室」に入居者が順番を待つ。

「どんなカットでもいいなんて言わないで。かっこよくなりましょうよ」「ふわっとしていいですよ」――。スタッフの会話が心地よく響く。「ありがと」。鏡にはほおが緩んだ顔が映る。(前田伸也)

訪問理美容のパイオニア的存在で、全国訪問理美容協会(世田谷区)の藤田巌理事長(73)によると、2000年に介護保険制度が始まったのを機に、訪問理美容はビジネスとして展開されるようになり、業者数は全国に約1200ある。だが需要に追いついておらず、理美容資格を持つパート勤務は貴重な存在だ。同業者が増えて競争が激しくなり、低価格傾向になることも予想される。

増える需要 競争激化へ

介護の知識は必要条件となりつつある。独自の資格を設けている団体の一つ、一般社団法人日本美容福祉学会(渋谷区)は、04年から「美容福祉師」の資格基準を作り、4種類の資格を認定している。15年3月末現在、社会福祉士の資格を持つ上級に12人、介護福祉士の1級287人、ホームヘルパーの2級443人、講習会を修了した6648人と、計7390人が認定された。

自宅の和室でカラーリング=武蔵野市